

前言 緣起與目的

一、緣起

1972 年臺日斷交之後，雙方在經貿、文化、教育之實質交流仍然相當密切，自 1960 年代起，臺灣在大學的正式課程實施日語教育已屆五十年，目前全國各大學設立日本語文學系、應用日語系者高達四十餘所。其中約有百分之三十的學校設有碩士班及東吳博士班一所、政大日本研究博士學位學程。同時有十所大學設有日本研究中心，但蓬勃發展的日本語教育，與達到「培養知日人才」的理想目標仍有一段距離。因此，各大學日本研究中心未來該如何發展？探討現今臺日實質交流所面臨的問題點，深入瞭解日本的深層文化及其民族、國家，促進研究人才的整合，深化多領域的日本研究，作為提升國內產、官、學界與日本關係的正確指標，進而培養下一代日本研究的優秀人才，以利臺日雙方發展更高層次的關係，是刻不容緩的課題。

2010 年 12 月，一群「有識者」為了瞭解世界各國日本研究的現況，邀請國外十五位知名的專家學者，以「臺日相互理解的思索及實踐」為題，進行一場跨領域的日本研究論壇，作為未來臺灣國內發展日本研究的參考。日本前文化廳長官青木保教授在「異文化中的視野：國際日本研究的可能性」的演講中，分析區域研究的重要性，介紹美國及亞洲各國日本研究的現況，說明臺灣已具備日本研究的基礎條件。¹

¹ 論壇的詳細內容，請參考徐興慶·太田登編《國際日本学研究的基層

有鑑於此，亞東關係協會會長李嘉進博士先後召集國內各大學日本研究中心、日文系等專家學者組成「臺灣各大學 2015 日本研究聯合論壇」籌備委員會，歷經三次討論，促成了這次論壇的召開，並委託本中心承辦。在此特別感謝亞協李會長、文教組長顧欽誠先生為本論壇籌措資金所做的努力。

本次聯合論壇邀請總統府資政江丙坤博士、日本政治學會理事長辻中豐教授、東京大學工學研究科隈研吾教授，分別就經濟、公民社會及建築文化等三個領域發表專題演講。論文發表分三個領域，本人以「臺日『異文化』的相互理解與日本研究的再發展」為題發表文化領域的論文、張啟雄教授以「二次安倍內閣的聯美制中外交政策」為題發表國際關係領域的論文、蘇顯揚教授以「安倍經濟學的課題與展望」為題發表經濟領域的論文。

此外，本次論壇邀請各大學的專家學者，分別就「臺灣的日本研究人才如何結合」及「日本研究年輕學者的培育—從日本語文教育到日本研究—」兩大主題進行討論，每位與談人都能積極提供寶貴意見並做充分討論。以上，專題演講、論文發表及論壇的內容均在本書中詳細呈現，相信這些精闢的論述、有建設性的內容不但可供提升臺日關係之參考，亦可對未來國內發展日本研究帶來深遠的影響。

—台日相互理解の思索と実践に向けて—》，日本學研究叢書 1（臺北：臺大出版中心，2013）。

二、問題與思考

全球化、區域化、在地化快速變遷的時代，我們深切感受到過去專注於培育日本語文專業人才達到良好的目標，卻在銜接日本研究人才的培育上出現了瓶頸，導致「日本研究」難以成為政府（科技部）認可的一個學門。展望未來，臺灣面對國際社會日趨重視的跨領域研究之時勢潮流，我們必須立足於先進賢達奠基國內厚實的日本語文教育，認真思考國內日本研究人才的培育問題。

東亞地區現在面臨歷史性的轉換期，各國在歷史認識、領土問題方面的「區域認知（Area Identity）」依然薄弱，導致互不信任，對立加深，這種因民族主義的衝突而產生對立（Escalation）致無法解決的情況，是令人擔心的事實。我國在社會、文化、教育、經濟方面，雖日趨受到國際社會的關注，但與日本之間因無邦交，常常受制於中國大陸的反應，因此大家更需要關注東亞國際社會及中日之間政治結構變動的事實，以了解東亞各國的多樣性社會所呈現的複雜問題。

就地理位置與條件而言，我國與日本同為島國，地震頻繁，災難救助、醫療、老人化、少子化問題都呈現類同的現象，雙方航線、漁權的資源共享，在在皆需要談判的人才。透過政府及民間企業的支援，若能落實日本研究的人才整合及培育，探討日本的深層文化及其民族性，他山之石，可以攻錯。經驗的攝取與互補，必能提升臺日之間實質的良好關係，進而對東亞的區域形成作出貢獻。

日本研究屬於「區域研究」（Area Studies）的範疇，現今東亞國際社會最具有必要性的，即是區域內各國之間互補性的研究，

而我國的日本研究在其中更需要加以定位。透過本次論壇，思考（1）臺灣日本研究的人才整合與發展方向；（2）東亞日本研究的國際合作；（3）日本研究的人才培育等未來臺灣日本研究的策略，同時建立與世界各國日本研究機構的橫向聯繫、交換資訊，並構築人文及社會科學的對話機制。

三、策略、轉機與目的

二十世紀，冷戰結束及全球化帶給國際社會嶄新的變化，導致傳統的「區域研究」面臨重大的挑戰，尤其是高度資訊化的社會，知識、資訊急速大眾化，「區域研究」的專業性受到新的挑戰。而臺灣的日本研究一直停留在教育體制與現實社會的人才運用脫節的狀態。亦即國內日本研究發展的相互認知，呈現「語言學習化」的現象，而且日益顯著。有鑑於此，我們必須重新思考建構國內的日本研究機制，建立往下紮根的整合體制，以呈現複合、多元的良性發展，培育未來國內的日本研究人才，並展開新的學際合作、國際共同研究的新趨勢，進而思考「專家」與「知識份子」所扮演的功能及其意義。如何將綜合的、多元的日本研究知識經驗提供大家分享，尋求理解，進而謀求解決之道，是舉辦論壇之主要目的，透過「專家」與「知識份子」集思廣益，將問題檢討與改進，化危機為轉機，是今後國內發展日本研究必須推動的新方向。

徐興慶 誌於臺大日本研究中心

2015年6月20日

一、開催趣旨

日本と台湾は、1972年の国交断絶後も、経済・文化・教育各分野におけるつながりは途絶えることなく、今日に至るまで密な交流を続けてきた。1960年代以降、台湾の大学では日本語教育が実施しはじめ、現在では台湾全土に日本語文学科、応用日本語学科を持つ大学は約40校にのぼる。そのうちのほぼ30%は修士課程及び東呉の博士班、政治大学の「日本研究博士学位学程」を有し、さらに日本研究センターを設置している大学も十校に及んでいる。しかし、こうした日本語教育のめざましい発展の一方で、「知日人材の育成」という理想には、依然としてほど遠いのが現状である。こうしたなかで、各大学の日本研究センターは今後どのようにして発展していくべきなのであるか。今日の日台交流が直面している問題点を検討し、日本文化の深層やその民族・国家への理解や多領域での日本研究を深化させ、人材集結などを図らなければならない。国内の産・官・学界と日本との関係を高めるために正確な指標を設定し、次世代の日本研究分野の優秀な人材を育てることによって、日台双方がより深く広い分野で結びついていくこと、これは一刻の猶予もできない解決すべき課題である。

2010年12月に、「有識者」らによる有志によって、世界各国の日本研究の現状を把握するため、国外から15名の著名な日本研究の学者を招聘し、台湾国内における日本研究の発展に向けて、「台日相互理解の思索と実践に向けて」（台日相互理解の思索及実践）と題する学際的横断的な日本研究フォーラムが開

催された。元文化庁長官青木保教授による基調講演「異文化の視点：国際日本研究の可能性」（異文化中的視野：国際日本研究的可能性）では、地域研究の重要性や米国及びアジア諸国の日本研究の現況が紹介され、台湾はすでに日本研究の基礎的条件を具備しているという認識が示された。²

そこで、亜東関係協会会長李嘉進博士が国内各大学の日本研究センターや日文系などの日本研究の専門家たちを召集し、「台湾各大学 2015 日本研究連合フォーラム」準備委員会を組織された。これまで三回の準備会を重ねて、今回のフォーラムの開幕にいたったが、本センターはその運営を委託された。また、本フォーラム開催にともなう資金調達においては、李会長及び文教組長顧欽誠氏のご尽力があった。ここにあらためて厚く御礼申し上げる。

今回のフォーラムでは、総統府の内閣顧問の江丙坤博士、日本政治学会理事長辻中豊教授、東京大学工学研究科隈研吾教授に、経済、公民社会及び建築文化の各領域の基調講演をお願いした。また、私・徐興慶は、「台日の『異文化』の相互理解と日本研究の再発展」として文化領域から、張啓雄教授は「安倍内閣の連米中政策」として国際関係領域から、蘇顯揚教授は、「アベノミクスの課題と展望」として経済領域から、それぞれ

² フォーラムの詳細は、徐興慶・太田登編『国際日本学研究の基層—台日相互理解の思索と実践に向けて—（日本学研究叢書 1）』（台北、台大出版中心、2013 年）を参照。

論文を発表した。

その他、今回のフォーラムで各大学の専門学者を招いて「台湾の日本研究人材をいかに連携させるか」及び「日本研究の若手研究者の育成ー日本語教育から日本研究まで」の二つのテーマを設定して、各テーマに即して、議論を集めた。各パネリストには多くの高見を披露していただいた。

基調講演、論文発表、フォーラムの内容などの鋭い論述と建設的な内容は、必ずや未来台日関係の促進に参照され、さらに、今後国内の日本研究の発展に影響を及ぼすものと確信している。

二、問題の所在

台湾では、これまでおもに日本語を専門とする人材育成に力を注いできて、今やその目標は十分に達成されたといえる。しかしグローバル化、リージョナル化、グローカル化へと急速に移り変わる今日、日本研究の人材育成の観点からは、多くの困難な課題を見出すことができる。たとえば「日本研究」は、台湾政府（科技部）において、学問分野としてはまだ認知されていない。将来を見据えたとき、大いに推進されている領域横断的研究においては、台湾は国際社会でますます重要視されている。こうした時代の趨勢に対応するためには、今や私たちは、先駆者らがその基礎を確立したこれまでの日本語教育の成果に立脚しつつ、国内の日本研究の人材育成という課題に真正面から取り組まなければならない段階に至っているであろう。

現在、東アジアは歴史の転換期に遭遇している。歴史認識や領土問題における各国の「地域アイデンティティ (Area Identity)」は依然弱く、そのために相互不信を招き対立を深めている。このような、民族主義の衝突から対立 (Escalation) を生み、解決不能の状況の現状には、危機感を抱かざるを得ない。わが国でも、社会・文化・教育・経済の面で徐々に国際社会の関心を集めてはいるが、日本とは国交がないため、中国の意向に制約されることもしばしば起きている。ゆえに、東アジア国際社会及び中日間の政治構造の変動についてより関心を持ち、また東アジア各国の多様性社会が呈する複雑な問題を理解していく必要がある。

地理的位置と条件について言えば、わが国と日本は同じ島国であり、地震も同様に頻繁に発生する。災害救助、医療、少子高齢化といった社会問題も共通してみられ、また航路・漁業権の資源も共有しているため、いたるところで交渉の人材が必要とされている。政府や民間企業の支援を通して日本研究を担う人材の整合と育成が実現できるのであれば、日本文化の深層やその民族性への論議は、台湾にとってはいわば「他山の石」となる。歴史的経験の吸収と補完は日台関係の発展を可能にし、加えて東アジアの地域形成へも寄与する。

日本研究は、本来「地域研究」(Area Studies) の範疇に属している。それは現在の東アジア国際社会において最も必要とされ、東アジア地域内での各国の相互補完的な研究によってそれは推進される。この意味において、わが国でも、日本研究における位置づけを明確にする必要がある。本論壇を通して、(1)

台湾における日本研究の人材の統合と発展の方向、(2) 東アジア日本研究の国の枠を超えた地域内における協力、(3) 日本研究の人材育成等、台湾の未来に向けた日本研究の方策、の3点について検討し、併せて、世界各国の日本研究機構相互の横のつながりを深め、「人文と社会科学の対話」のしくみを構築したい。

三、 目指す方向とその方法

20世紀の冷戦の終焉とグローバリゼーションが国際社会に与えた新たな変化は、伝統的な「地域研究」を次なる大きな挑戦の段階へと導いた。ことに高度情報化社会、知識や情報の大衆化など、「地域研究」の専門性は新局面を迎えつつある。そうした状況のなかで、台湾における日本研究は、実際に社会が求める人材育成に応えるだけの教育体制をいまだ構築できていないままである。同様に、国内の日本研究発展に関わる相互認識はなお「言語学習化」現象を呈し、それはますます顕著となっている。こうした事態を前に、我々は国内の日本研究のあり方について再検討し、確固とした基盤を持つ研究を統合した体制を構築しなければならない。そうすることによってこそ、日本研究の多元的な発展を実現し、国内の次世代日本研究者を育成し、さらに新たな学術協力・国際共同研究を推進できるであろう。その上で「専門家」と「知識人」が担う役割とその意義について考えることが求められている。ならば、いかにして以上のような、総合的かつ多元的な日本研究の知識と経験を共

有し、相互理解を深め、その発展の道を追求できるのか。これこそ、本フォーラム開催の主な目的であり、「専門家」と「知識人」の衆知を集め、問題の所在を検討することを通して、その改善策を模索していく。

「危機を転機に変える」——これが今後、国内の日本研究発展のために、いまなすべき新たな方向であると確信する。

I. Origin

After the severance of diplomatic relations between Taiwan and Japan in 1972, the bilateral cultural, economic, educational exchanges remain close. It has been fifty years since the first Japanese language courses was officially offered in Taiwan's university in the 1960s. Nowadays, forty universities have established the department of Japanese language and literature or the department of applied Japanese language. Among them, thirty percent of these departments established master programs (Soochow University and NCCU Program in Japan Studies include doctoral program) and ten universities established the center for Japanese studies. Despite that Japanese language education has developed vigorously, there is still a long way to go before it reaches the ideal goal of "training professionals who truly understand Japan." Therefore, to which direction should the centers for Japanese studies in Taiwan's universities head? There are several urgent tasks: Discuss the problems encountered in the actual exchanges between Japan and Taiwan; understand Japan's deep culture, nation, government profoundly; promote the integrations of researchers; intensify multi-disciplinary Japanese studies; serve as correct indicators in promoting the relation between Japan and Taiwan's industrial, governmental, and academic sector, and train the outstanding professionals in the field of Japanese studies. It will help to bring Taiwanese-Japanese relations to the higher level.

In December 2010, in order to understand the current situation

of Japanese studies in the world, a group of “Yushikisha (有識者, translated as knowledgeable people)” invited fifteen foreign notable specialists and scholars to Taiwan and hold a cross-discipline forum of Japanese studies entitled “Thinking and Practicing Taiwan-Japan Mutual Understanding.” This forum provides some insights for future Japanese studies development in Taiwan. In the lecture “View from Other Culture: Possibility of International Japanese Studies,” delivered by the former Director General of the Agency for Cultural Affairs Professor Tamotsu Aoki, he analyzed the importance of area studies and introduced the current situation of Japanese studies in the United States and other Asian countries. He pointed out that Taiwan has already met the basic qualification of Japanese studies.

In view of the above, Dr. Chia-Chin Lee, President of Association of East Asian Relations, convened specialists and scholars from Centers for Japanese Research and Department of Japanese Literature and Language at the Universities in Taiwan to establish the Preparation Committee of “Joint Forum 2015 – Japanese Studies in Taiwan.” After three meetings, the committee decided to hold this forum. We express our sincere gratitude to President Dr. Chia-Chin Lee and Division Director Ching-cheng Ku of Association of East Asian Relations for financing the publishing of this book.

In this forum, we had honor to invited three important guest speakers from three disciplines, economy, civil society, and artitecture culture, to deliver special lectures. These three important

speakers were Dr. Chiang Pin-kung, Senior Advisors to the Office of the President, Professor Yutaka Tsujinaka, President of Japanese Political Science Association, and Kengo Kuma, Professor at the Department of Architecture, Graduate School of Engineering at the University of Tokyo. In the research paper presentation section, there are three research papers from three disciplines. In the culture discipline, I presented my research paper entitled “Taiwanese-Japanese ‘inter-cultural’ understanding and redevelopment of Japanese Studies.” In the international relations discipline, Professor Chang Chi-hsiung provided a presentation of his research paper “Adopting the Foreign policy of ‘Balancing China with the U.S.’ in the second Abe Administration.” In the economic discipline, Professor Hsien-Yang Su presented his research paper “The Tasks and Prospects of Abeconomics.”

Moreover, in the third section, participants in this forum discussed two themes: “How to combine professionals’ expertise in the field of Japanese studies in Taiwan” and “Training young scholars in the field of Japanese studies – from Japanese literature and language education to Japanese studies.” Every participant actively provided pleasure opinions and discussed these two themes in depth.

This book consist of the comprehensive content of these three sections in this forum, including spcial lectures, research peper preseations, and forum discussion. We believe that these insightful arguments and constructive content not only can provide imporant

reference for Taiwanese-Japanese relations but also can bring profound influence to the future development of the field of Japanese studies.

II. Problem and Thinking

In the era with rapid changes characterized by globalization, regionalization and localization, we fully realize that this field has been focused on training professionals in the subfield of Japanese literature and language and indeed achieved fruitful results; however, this field overlooked the importance of training professionals of Japanese studies as a whole and consequently not enough young scholars can carry on tasks left by the last generation. The result is that our government (Ministry of Science and Technology) has not recognized Japanese studies as a discipline yet. For future perspectives, Taiwan now faces the worldwide trend of emphasizing inter-discipline research. Based on the solid foundation in the Japanese literature and language training established by our predecessor, we need to sincerely think about the problem of training professionals for the whole field of Japanese studies.

The region of East Asia is now facing a historical transition period. “Area Identity” in the aspects of history understanding and territorial issues among East Asian countries remain disaccord. This bred mutual distrust and intensification of conflict. We are concerned that the escalation of frictions resulted from the conflict of nationalisms may cause the inextricable situation. Although the

international society has increasing interests in societal, cultural, education, and economic situation in Taiwan; however, because there is no official diplomatic relations between Taiwan and Japan, Taiwan's relations with Japan are restricted by China's responses. Thus, we need to notice the fact that the political structures in the East Asian region and between Japan and China have changed and understand the complicated problem presented by diverse societies of the East Asian countries.

Regarding the geographical location and condition, Taiwan and Japan are both island countries and encounter the similar problems like earthquake, disaster relief, medication, aging, sub-replacement fertility, etc. Moreover, Taiwan and Japan share air route and resource of fishing and Taiwan needs professionals who is able to negotiate with Japan. If we can train and integrate professionals specializing in Japanese studies through the support of government and private enterprises, we are able to investigate Japan's culture and nationality and learn lessons from Japan's experiences. Learning from Japan's experience and overcoming each other's shortcoming will strengthen ties between Japan and Taiwan and contribute to the further integration of East Asian region.

Japanese Studies is a part of "Area Studies." The most important studies that the East Asian society needs is the complementary research in the East Asian countries. In addition, it is necessary for Japanese studies in Taiwan clarifying its position. Through this forum, we hope to deliberate several issues: (1) the

integration of professionals and the development direction of Japanese studies in Taiwan; (2) The international cooperation of Japanese studies in the East Asia; (3) The future strategies of Japanese studies in Taiwan, e.g. training professionals of Japanese studies. Except these, we should establish lateral communication and exchange information with the institutions of Japanese studies in the world and establish the dialogue mechanism between humanity and social science disciplines.

III. Strategy, Opportunity, and Goal

In the twentieth century, the end of Cold War and globalization brought new changes to international society and it caused critical challenges to the traditional “area studies.” Especially in a highly information society, the public can access to the knowledge and information rapidly and it challenges the professionalism of “area studies.” Japanese studies in Taiwan trapped in a situation that the trainings in the education system do not meet the actual needs in the society. In other words, the mutual perception of the development of Japanese studies in Taiwan is limited to “language training” and it becomes increasingly apparent. Based on this, we need to rethink about constructing an integration mechanism of Japanese studies in Taiwan. This mechanism should encourages all the institutions develop compoundedly and diversely, train future professionals of Japanese studies, response to the new trend of cross-institutional cooperation and international joint research, and think about the

function and meaning of “specialists” and “intellectuals.” The main purpose of this forum is to discuss how to share the comprehensive and diverse knowledge and experience of Japanese studies with each other and seek for understanding and solution. Borrowing the thoughts and knowledge of “specialists” and “intellectuals,” we hope to discuss the problems and get improvement and turn a crisis to an opportunity. We consider the development of Japanese studies should head to this new direction.